言語研究（*Gengo Kenkyu*）**161**: 63–89（2022）　doi: 10.11435/gengo.161.0_63

秋田県横手市方言の有核動詞に関するアクセント規則
――弱強フットを用いた分析――

菅　沼　健太郎
金沢大学

【要旨】本論文では秋田県横手市方言の有核動詞の過去形，非過去形のアクセントパターンについて論じる。同方言の有核動詞のアクセントは，過去形におけるそのパターンが多様である点，さらにその一方で非過去形では一貫したパターンが現れる点で特徴的である。具体的には，過去形では語幹の拍数や末子音の種類などに応じて次々末拍，次末拍，末拍のいずれかに下がり目が置かれる。その一方で非過去形では一貫して次末拍に下がり目が置かれる。

本論文ではこれらのアクセントパターンが弱強フットを中核とした規則群によって導かれることを示す。さらに，検討課題が残されているものもあるが，本論文で提案した規則が形容詞のアクセント，および他の動詞活用のアクセントを説明するためにも有効であることを示唆する *。

キーワード：秋田県横手市方言，有核動詞，アクセント，弱強フット

1. はじめに

秋田県横手市方言（以下，横手市方言と呼ぶ）は図 1 に示すように秋田県内陸南部の横手市で話されている言語である。本論文ではこの横手市方言の有核動詞のアクセントパターンを整理し，そのパターンが弱強フットを中核とした規則群によって導かれることを示す。

同方言の動詞には，ピッチの下がり目をもつ有核動詞とそれをもたない無核動詞の 2 種類がある。この内，有核動詞の過去形と非過去形のアクセントパターンを以下の表 1 に示す。有核動詞の過去形では動詞語幹によって，下がり目 (') の位置が次々末拍 (-3)，次末拍 (-2)，末拍 (-1) のいずれかになる。一方，非過去形では常に -2 に下がり目が置かれる。

表 1 と同じパターンの報告は近藤（2015, 2016a）の秋田県男鹿市方言の研究にもある。また，大橋（2001: 69–72）の秋田県秋田市方言の研究では特に非過去形のアクセントがまとめられており，それも表 1 と同様のパターンを示している。このことから, 表 1 のパターンは横手市に限らず県内の多くの方言に共通すると言えよう。

* 本稿の執筆に際し，匿名査読者の先生方，および松浦年男氏，佐藤久美子氏からは多くの貴重なご指摘とコメントを頂いた。ここに記して御礼申し上げる。また，データの収集にご協力いただいた 3 名の秋田県横手市方言母語話者に感謝申し上げる。なお，本研究は文部科学省の卓越研究員事業の支援を受けたものである。

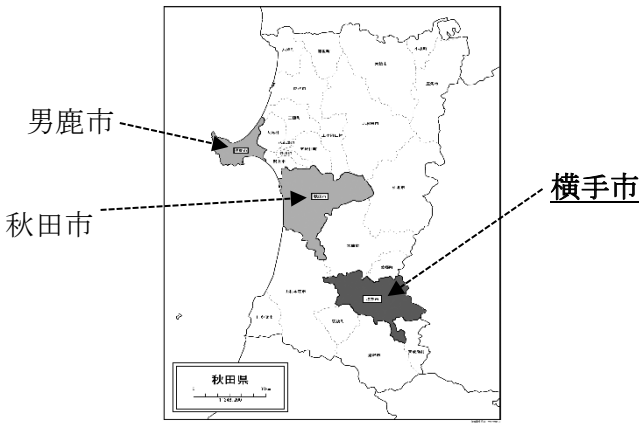

図 1　秋田県横手市, および先行研究での言及がある男鹿市と秋田市の位置（図は https://www.freemap.jp/ の白地図をもとに筆者が作成）

表 1　横手市方言の過去形と非過去形のアクセントパターンの音素表記
（音声形と具体的なアクセントの実現については 3 節参照。）

			過去形 /-ta/		非過去形 /-(r)u/	
a.	das-	‘出す’	da'si-ta	次々末拍 (-3)	da's-u	次末拍 (-2)
b.	oki-	‘起きる’	oki'-ta	次末拍 (-2)	oki'-ru	次末拍 (-2)
c.	nom-	‘飲む’	noN-da'	末拍 (-1)	no'm-u	次末拍 (-2)
d.	de-	‘出る’	de-ta'	末拍 (-1)	de'-ru	次末拍 (-2)

しかし，近藤（2015, 2016a），大橋（2001）ともに個別のパターンの説明にとどまっており，包括的にどのような規則群によってこれらのパターンが生み出されるのかは明らかにされていない。そこで，本論文では横手市方言の過去形と非過去形を対象とし，そのアクセントパターンを導く規則群を提案する。

このように本論文では対象を過去形と非過去形に絞る。しかし，横手市方言には他の動詞活用も当然存在する。また，動詞同様活用をする形容詞も存在する。本論文で提案する規則はそういった他の活用におけるアクセントパターンも広く説明できるが，一部検討課題を残すものもある。そのため，これらの活用については基本的には 5 節「動詞過去形・動詞非過去形以外の活用」で扱い，説明可能な活用と検討課題を残す活用について述べる。なお，本論文のデータは以下の 3 名の話者の協力の下，筆者が 2018 年 5 月から行っている調査によって得たものである。

(1)　A 氏：女性，1935 年秋田県横手市生まれ，出生から現在まで同地に居住。
　　B 氏：女性，1960 年秋田県横手市生まれ，18 歳まで同地に居住。その後県外で暮らし，現在は埼玉県在住（氏への調査は氏の横手市帰省中 2019 年 5 月に実施した）。

C 氏：女性，1962 年秋田県横手市生まれ，出生から現在まで同地に居住。

同方言の形態論的特徴，分節音的特徴に関するデータは 3 名全員から，そしてアクセントに関するデータは全て A 氏と C 氏から得たものである。B 氏のみ県外での居住が長いが，本論文での議論に関わる部分においては B 氏含め，話者間での内省の相違はみられなかった。以降では適宜語例としてピッチ曲線などの音声データを示すが，それらは全て A 氏の発話データをもとにしたものである。また，本節も含め本論文では語例においては接辞（活用語尾）境界を‘-’，接語（助詞）境界を‘=’で表すことにし，大きく議論に関わらない限り音声形は簡略音声表記で示す。

2. 横手市方言の有核動詞のアクセントに関わる形態論的，音韻論的特徴

有核動詞のアクセントパターンの観察と分析に移る前に，ここではその分析に関わる事柄として，動詞語幹の種類と音交替，母音の無声化と子音の有声化の相互作用，アクセントの基本的特徴，の 3 つについて述べる。

まず動詞語幹の種類と音交替であるが，動詞語幹には（2）から（4）に示す母音語幹, 子音語幹, 変格活用語幹の 3 種類がある。このうち子音語幹は末尾に /k, g, s, n, m, b, w, t, r/ のいずれかをもつ。なお，これ以降，本論文では子音語幹に対して末子音に応じた呼称を用いる。例えば，/das-/ は /s/ 語幹，/kak-/，/kog-/ はまとめて /k, g/ 語幹，のように呼ぶ。

（2）　母音語幹：/oki-/‘起きる’，/kake-/‘掛ける’，/de-/‘出る’
（3）　子音語幹：/kak-/‘書く’，/kog-/‘漕ぐ’，/das-/‘出す’，/sin-/‘死ぬ’，/kam-/‘噛む’，/tob-/‘飛ぶ’，/kaw-/‘買う’，/kat-/‘勝つ’，/tor-/‘取る’
（4）　変格活用語幹：カ行変格‘来る’とサ行変格‘する’の 2 つのみが存在する。これらは語幹の異形態をもつ。以下に過去形と非過去形で現れる語幹を示す。/ki-/, /ku-/‘来る’，/si-/, /su-/‘する’

これらの語幹に /-ta/, /-(r)u/ が接続した際に生じる音交替は，東京方言のそれとほぼ同じだと考えてよい。例えば /s/ 語幹では過去形において /dasi-ta/‘出した’のように語幹末に /i/ が挿入される。ただし同方言の /si/ は [sɨ] で実現し /s/ の硬口蓋化は起きない。この /i/ の挿入は東京方言同様 /k, g/ 語幹でも起き，これらではさらに /kai-ta/‘書いた’のように末尾の /k, g/ の削除が起きる [1]。また，/n, m, b/ 語幹で /kaN-da/‘噛んだ’のようにいわゆる撥音便が, /w, t, r/ 語幹で /kat-ta/‘買った’のようにいわゆる促音便が起きる点，/-(r)u/ の初頭の /r/ が子音語幹に接続する際には現れない点も東京方言と同じである [2]。一方で，東京方言とは異なる点として，

[1] ただし /ik-/‘行く’では東京方言同様 /it-ta/‘行った’のように促音便が起きる。
[2] 以降も子音連続または母音連続回避のために削除される分節音を括弧つきで表記する。

/-ta/ は [kanda]‘噛んだ’のように撥音便が生じる語幹以外にも，母音語幹に接続する際に [deda]‘出た’のように [da] で実現することが挙げられる。これは横手市方言では母音間の無声破裂音が有声化する子音の有声化現象があるためである。

次に母音の無声化と子音の有声化の相互作用について述べる。横手市方言では高舌母音 /i, u/ は [das̥ɨta]‘出した’，[das̥ɯ̞]‘出す’のように，無声子音に挟まれた場合，あるいは無声子音に後続し語末に位置する場合無声化する[3]。この母音の無声化は先述の [deda]‘出た’でみた子音の有声化と互いの生起に影響を与え合う。例えば [ogida] /oki-ta/‘起きた’のように有声化した子音は母音の無声化を引き起こさない（*[og̥ida]）。またその一方で [das̥ɨta] /dasi-ta/‘出した’のように無声化した母音は子音の有声化を引き起こさない（*[das̥ɨda]）。

本論文の対象はアクセントであるため，この相互作用についての詳細な議論は行わないが，おそらく母音の無声化と子音の有声化を引き起こす規則はともに語頭から査定していき，先に適用環境に合致するものから順次適用されると考えられる。例えば [ogida] /oki-ta/‘起きた’では有声化適用環境である /oki/ が無声化適用環境である /kit/ に先行するため，有声化が起きる。そして [das̥ɨta] /dasi-ta/‘出した’では無声化適用環境である /sit/ が有声化適用環境である /ita/ に先行するため，無声化が起きる。仮に語頭からの査定を考えずに，一方の規則が語全体に適用された後に他方が適用されると考えてしまうと，*[dasɨ-da]（有声化規則が先に適用と仮定），*[ok̥i-ta]（無声化規則が先に適用と仮定）のように正しい音声形を導けない。本論文での議論では特に [das̥ɨta] のように /s/ 語幹において /i/ の無声化が起きることが重要になる。なお，横手市方言では無声破裂音の母音間での有声化がみられると同時に，有声破裂音の母音間での前鼻音化もみられるため，母音間における子音の対立は有声対前鼻音という形で維持される（例 /ito/ [ido]‘糸’vs. /ido/ [i^{n}do]‘井戸’）。

次に，アクセントの特徴を述べる。横手市方言のアクセント体系は，①下がり目の有無とその位置が弁別的である，②無声化母音と子音拍（促音，撥音）に下がり目は置かれない，という 2 つの特徴をもつ。①を示すものとして図 2 に疑似ミニマルトリプレットのピッチ曲線を示す。これらは順に語頭 1 拍目に下がり目あり（/ha'si/‘箸’），語頭 2 拍目に下がり目あり（/asi'/‘足’），下がり目なし（/hasi/‘端’）となっている。

図 2 の /asi'=mo/‘足も’にみるように，語頭 1 拍目はそこに下がり目がない限り低音調となる。これは東京方言にもある Initial lowering（Haraguchi 1977: 17）だと言える。ただし，調査した限りでは，この Initial lowering は /hasi/‘端’のような

[3] 無声子音に挟まれる環境に関して，より正確には，高舌母音は無声子音に挟まれ，かつ非高舌母音が後続した際に無声化する（[das̥ɨta]）。このように東北方言の無声化に後続母音が関わることは大橋（2002: 169–172）でも述べられている。なお，[dasɯ̞]‘出す’について，[u] は厳密には非円唇の [ɯ] である。また同方言の /i, u/ は /s/ の直後では共に中舌化し中和する傾向にある。つまり /dasu/ は厳密には [dasɨ̞]，あるいは [das̥ɯ̟̞] で実現するが，本論文では非円唇性も含めこの点は捨象し [u] と表記する。

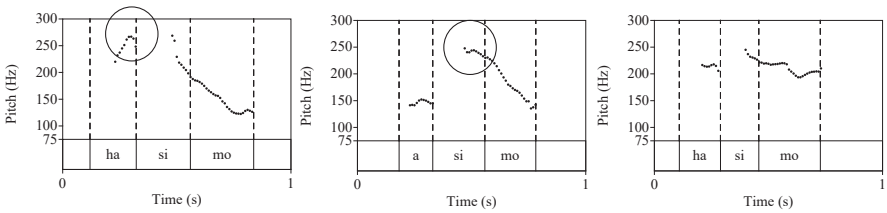

図 2　/ha'si=mo/‘箸も’（左），/asi'=mo/‘足も’（中），/hasi=mo/‘端も’（右）

下がり目のない語（無核語）では明確な実現をみせないときがある。この無核語における Initial lowering の生起に音韻論的条件があるかどうかは，まだ明らかではない。本論文では無核語ではなく有核語, すなわち下がり目のある語を主に扱うため，ここでは暫定的に無核語では Initial lowering は義務的ではなく，それが起きた場合には語頭 2 拍目から，起きなかった場合には語頭 1 拍目から自然下降を伴った平らな音調が始まると考える。

なお，下がり目の位置が弁別的になるのは名詞のみであり，動詞と形容詞では下がり目の有無，すなわち有核か無核かという点のみが弁別的となる（例 有核 /kake'-ru/‘掛ける’，無核 /kake-ru/‘欠ける’）。また，調査した限りでは東京方言で有核動詞であれば横手市方言でも有核動詞，東京方言で無核動詞であれば横手市方言でも無核動詞である，という対応関係があった。

②の例としては以下の（5），（6）が挙げられる。横手市方言では「県」が後部要素となる複合語，および「個」を用いた数詞では通常（5a），（6a）に示すように前部要素の -1 に下がり目が置かれる。しかし，（5b），（6b, c）に示すように前部要素の -1 が無声化母音，促音，撥音のいずれかであった場合，下がり目は前部要素の -1 ではなく -2 に置かれる。

（5）　/keN/‘県’　a. aomori' keN‘青森県’　b. yamana'si̥ keN‘山梨県’
（6）　/ko/‘個’　a. nana' ko‘七個’　b. i'k ko‘一個’　c. sa'N ko‘三個’

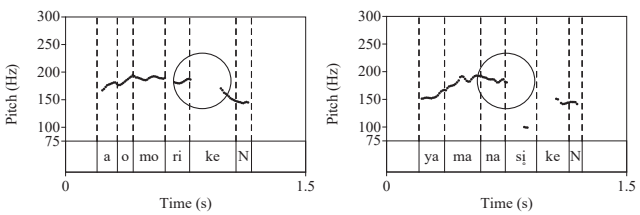

図 3　/aomori' keN/‘青森県’（左），/yamana'si keN/‘山梨県’（右）

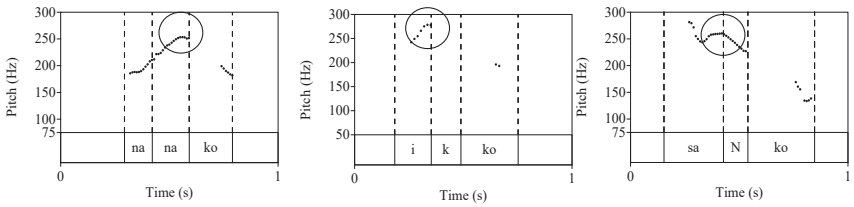

図 4　/nana' ko/‘七個’（左），/i'k ko/‘一個’（中），/sa'N ko/‘三個’（右）

次節では具体的に動詞のアクセントパターンをみていく。

3. 有核動詞と無核動詞のアクセントパターン

以下の表 2 から表 4 に有核動詞のアクセントパターンを 2 例ずつ示す。これらは全て子音の有声化，前鼻音化，母音の無声化を反映した簡略音声表記で示されており，高音調で実現する箇所は太字で表されている。なお，過去形において -1 に下がり目が生じる語例では /=na=da/‘のだ’を接続させ，比較のため，その下に無核動詞の例を加えた。また，無核動詞の音調では Initial lowering を捨象した。

1 節でも述べたが，有核動詞をみると，非過去形では一貫して -2 に下がり目が生じる一方，過去形では語幹によって下がり目の位置が異なる。以下ではこの過去形を詳しくみる。

表 2　母音語幹

		過去形 /-ta/		非過去形 /-(r)u/	
語幹拍数 2 拍以上	/oki-/‘起きる’	o**gi**'-da	(-2)	o**gi**'-ru	(-2)
	/atume-/‘集める’[4]	a**dzume**'-da		a**dzume**'-ru	
語幹拍数 1 拍のみ	/de-/‘出る’	de-**da**'=na=^{n}da	(-1)	**de**'-ru	(-2)
	/mi-/‘見る’	mi-**da**'=na=^{n}da		**mi**'-ru	
	無核：/ne-/‘寝る’	**ne-da=na=^{n}da**		**ne-ru**	

表 3　子音語幹

		過去形 /-ta/		非過去形 /-(r)u/	
/s/ 語幹	/das-/‘出す’	**da**'s̬-ta	(-3)	**da**'s-u̬	(-2)
	/otos-/‘落とす’	o**do**'s̬-ta		o**do**'s-u̬	
/k, g/ 語幹	/kak-/‘書く’	**kai**'-da	(-2)	**ka**'g-u	(-2)
	/kog-/‘漕ぐ’	**koi**'-^{n}da		**ko**'^{n}g-u	
/t, w, r/ 語幹	/kat-/‘勝つ’	ka**t-ta**'=na=^{n}da	(-1)	**ka**'dz-u	(-2)
	/hasir-/‘走る’	ha**s̬t-ta**'=na=^{n}da		ha**si**'r-u	
	無核：/kaw-/‘買う’	**kat-ta=na=^{n}da**		**ka-u**	

[4] /tu/ の /t/ は破擦音化する。また直前が母音である場合は有声化も起き [dz] となる。この [dz] は基本的に母音間であってもその破裂性を維持し [z] ではなく [dz] で実現する。

/m, b, n/ 語幹[5]	/yom-/ ‘読む’	jo**n-da**'=na=^{n}da	(-1)	**jo**'m-u	(-2)
	/erab-/ ‘選ぶ’	e**ran-da**'=na=^{n}da		e**ra**^{m}'b-u	
	無核：/yob-/ ‘呼ぶ’	**jon-da=na=^{n}da**		**jo^{n}b-u**	

表 4　変格活用語幹（有核：‘来る’，無核：‘する’の各 1 例のみ）

	過去形 /-ta/		非過去形 /-(r)u/	
/ki-/, /ku-/ ‘来る’	ki̥-**ta**'=na=^{n}da	(-1)	**ku**'-ru	(-2)
無核：/si-/, /su-/ ‘する’	**si̥-ta=na=^{n}da**		**su-ru**	

まず，表 2 の母音語幹動詞の過去形では，語幹の拍数によりパターンに違いがみられ，2 拍以上であれば -2，1 拍であれば -1 に下がり目が生じる。以下に 1 拍母音語幹の例として有核動詞の /de-ta'=na=da/ ‘出たのだ’と無核動詞の /ne-ta=na=da/ ‘寝たのだ’のピッチ曲線を示す。/de-ta'=na=da/ では /=na=da/ ‘のだ’の直前に下がり目が生じており，/ne-ta=na=da/ とは異なるピッチ曲線が現れる[6]。

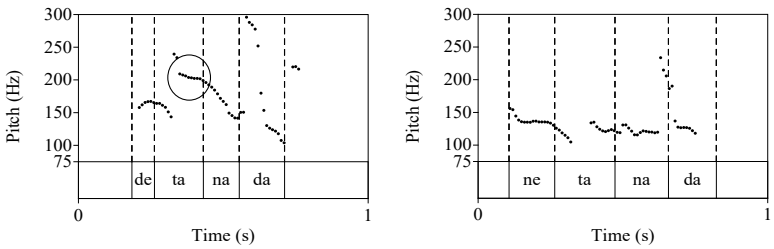

図 5　/de-ta'=na=da/ ‘出たのだ’（左），/ne-ta=na=da/ ‘寝たのだ’（右）

この下がり目が仮に /=na=da/ ‘のだ’によるものだとすると，無核動詞 /ne-ta=na=da/ でもこの下がり目が観察されることが予測されるが，実際には無核動詞では下がり目は生じていない。また，/na=da/ ‘のだ’以外の接語，例えば終助詞 /=yo/ ‘よ’などを接続した場合でも，[de-**da**'=jo] ‘出たよ’，[**ne-da=jo**] ‘寝たよ’のような差異が観察された。そのため，この下がり目はやはり動詞が有核であるときのみ生じるということができる。

次に表 3 の子音語幹動詞の過去形をみる。/s/ 語幹動詞の過去形では -3 に下がり目が生じる。また /s/ 語幹動詞の過去形の特徴として，挿入されている母音 /i/ が [odo'si̥-ta] のように無声化することが挙げられる。これはより正確には以下の図 6

[5] ここでは /n/ 語幹を示していないが，/n/ 語幹には 1 例 /sin-/ ‘死ぬ’のみがある。これは無核であるのでその音調は /yob-/ ‘呼ぶ’などの他の無核動詞と同じになる。

[6] この -1 の下がり目は接語などの後続要素がない場合実現せず，語は高音調のまま終わる。佐藤（1982: 281）では，秋田市方言においては -1 に下がり目が生じる語（いわゆる尾高型の語）では後続要素がない場合，それが末尾に声門断止を伴うことが述べられているが，これは調査した限りでは横手市方言には当てはまらない。

に示すように [s] の調音の直後に [t] の閉鎖が確認される [odosta] のような音声形になる。この音声形を考慮すれば，元から /i/ が挿入されていないとする見方もできるが，横手市方言において /st/ という子音連続は認められない点，/si/ を発音しているという話者の直観がある点から，ここではやはり /i/ が挿入されており，それが音声形では無声化していると解釈する。

/k, g/ 語幹動詞の過去形では -2 に下がり目が生じる。この過去形の特徴としては，以下の図 7 にも示すように /ai/ などの母音連続全体が [**kai**'-da]‘書いた’のように高音調で実現することが挙げられる。/k, g/ 語幹はいわゆるイ音便が起きる語幹であり，日本語学会（2018: 116）では音便について，「軽音節 2 つが（中略）重音節 1 つに変化したと捉えられる現象」と述べている。これを考慮すると横手市方言において母音連続 /ai/ 全体が高音調で実現するのは，やはり [kai] が 1 つの重音節を形成しており，その音節の核音全体がアクセントにより高音調で実現したためだと考えられる [7]。

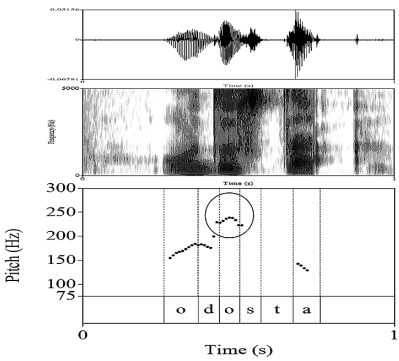

図 6　/oto'si-ta/‘落とした’の音声波形，サウンドスペクトログラム，ピッチ曲線

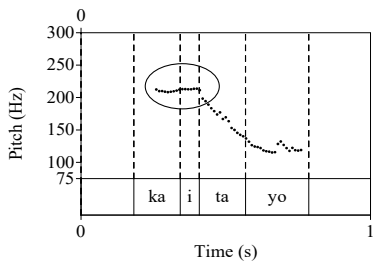

図 7　/kai'-ta=yo/‘書いたよ’

/t, w, r, m, b, n/ 語幹動詞の過去形では以下のように -1 に下がり目が生じる。

[7] このような音調は [o**i**'-da]‘老いた’のように，音便ではない母音連続ではみられない。これは [kai.da]‘書いた’の [kai.] と異なり，[oi-da] では [o.i.da] のように [o] と [i] が別々の音節にあるためだと考えることができる。[kai.] と [o.i.] という音節構造の違いは，例えば音便規則が /k, g/ の削除だけでなく，重音節の形成も担うと仮定すれば説明できる。

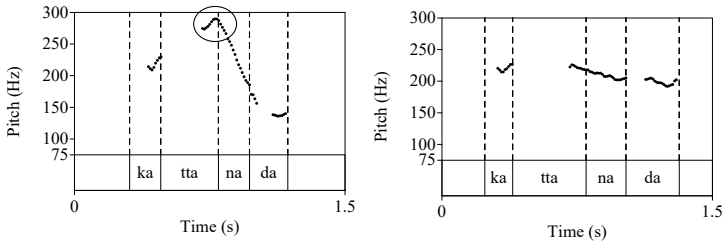

図 8　/kat-ta'=na=da/‘勝ったのだ’（左），/kat-ta=na=da/‘買ったのだ’（右）

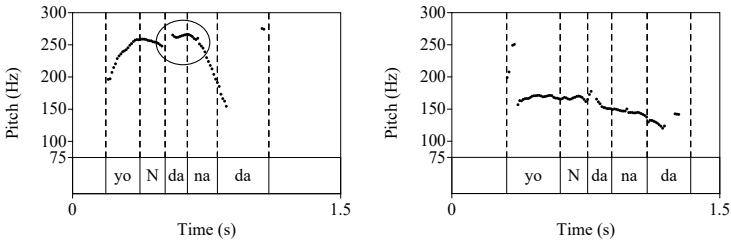

図 9　/yoN-da'=na=da/‘読んだのだ’（左），/yoN-da=na=da/‘呼んだのだ’（右）

図 5 の /de-ta'/ の -1 の下がり目には，1 拍という語幹の拍数が下がり目の位置に関与していたが，/t, w, r, m, b, n/ 語幹では /kat-ta'/‘勝った’，/yoN-da'/‘読んだ’のような 2 拍の語幹だけでなく，/hasit-ta'/‘走った’や /eraN-da'/‘選んだ’のように 3 拍以上の語幹でも同じパターンになるため，語幹の拍数は関与していない。

最後に表 4 の変格活用語幹であるが, これは /ku-ru/‘来る’が有核, /su-ru/‘する’が無核である。表 4 にみるように，/ku-ru/ の過去形 /ki-ta/‘来た’では /de-ta/‘出た’同様，-1 に下がり目が生じる。つまり，/ki-ta/‘来た’は全体の拍数や音節構造が /de-ta/ と同じであるため，アクセント上は 1 拍母音語幹と同じ扱いを受けているのである。

ここまでみてきた有核動詞のアクセントパターンを以下の表 5 にまとめる。次節ではこれらの分析を行う。

表 5　有核動詞のアクセントパターン

		過去形	非過去形
a.	2 拍以上の母音語幹	o**gi'**-da(-2)	o**gi'**-ru(-2)
b.	1 拍母音語幹およびカ行変格語幹	de-**da'**, ki̥-**ta'**(-1)	**de'**-ru, **ku'**-ru(-2)
c.	/s/ 語幹	o**do'**si̥-ta(-3)	o**do'**s-u̥(-2)
d.	/k, g/ 語幹	**kai'**-da(-2)	**ka'**g-u(-2)
e.	/t, w, r, m, b, n/ 語幹	ka**t-ta'**(-1)	**ka'**dz-u(-2)

4. 分析

4.1. フットの導入

表 5 にみるように，下がり目は語幹から屈折接尾辞（/-ta/, /-(r)u/）までのいずれかの拍に置かれている。本論文ではこの下がり目が置かれる範囲，すなわち語幹から屈折接尾辞までの範囲を韻律語と呼ぶことにする。韻律語という用語を用いつつ表 5 のパターンの説明を試みると，非過去形は「韻律語内の -2 に下がり目を置け」とする規則で捉えられるが，やはり過去形が問題になる。仮に韻律範疇として拍と音節だけを導入して規則を提案すると，その規則は「2 拍以上の母音語幹では韻律語内の -2 に下がり目を置け（[ogi'-da]）」，「/-ta/ の直前が閉音節の場合 -1 に下がり目を置け（[kat-ta']）」のようなパターンごとの規則に終始してしまい，なぜ閉音節では -1 に置かれるのか，といった基本的な問いに答えられない。本論文ではこの状況を打開するために，拍や音節に加え新たな韻律範疇としてフットを導入し，表 5 に示したパターンの説明を試みる。

フットというのは拍および音節よりも上位に位置する韻律範疇である。このフットは元来 Hayes（1995）のように英語などのストレス言語のアクセント分析において仮定されていたものであるが，近年では日本語・琉球語諸方言などのピッチ言語のアクセント分析（Shimoji 2009, Itô and Mester 2016, Poppe 2016 など）でも仮定されている。

Hayes（1995: 71）によれば，基本的にフットは 2 拍，あるいは 2 音節のまとまりによって形成される。そしてフット内の左端，または右端の韻律範疇（拍，または音節）がそのフットの主要部になるという[8]。左端の韻律範疇が主要部になるフットは「強弱フット（Trochaic foot）」，右端の韻律範疇が主要部になるフットは「弱強フット（Iambic foot）」と呼ばれる。また，語内に複数のフットが存在する場合，そのうち 1 つのフットの主要部にアクセントが置かれる。本論文ではそのようなアクセントが置かれるフットを主フットと呼ぶことにする。

以下の（7）に本論文でフット構造の表示に用いる記号群を示す。そしてフットによるアクセント位置決定過程の具体例として，以下の（8）に英語の例を示す。

（7）　本論文で用いる記号群（b, c では拍がフットを形成した場合のものを示す。）

a. < >：フット境界

b. $\boxed{\mu}$：フット主要部となった拍

c. $\boxed{\mu^{\times}}$：主フットとなったフットのフット主要部

[8] Shimoji（2009: 107）でも述べられているように，より厳密にはフットの内部に主要部の存在は含意されておらず，主要部のないフットの存在もありうる。横手市方言において主要部のあるフットに加えて主要部のないフットを仮定する必要があるかはまだ明らかではない。本論文では主要部のあるフットのみを仮定した分析を試みることにする。

(8)　英語の [mɪsəsɪ́pi]‘ミシシッピ（地名）’におけるアクセント位置決定過程

	/mɪsəsɪpi/	
i. フット境界（< >）形成	<mɪ.sə.><sɪ.pi.>	
ii. フット主要部（$\boxed{\sigma}$）決定	<$\boxed{\text{mɪ}}$.sə.><$\boxed{\text{sɪ}}$.pi.>	語例は Hayes (1995: 39)（20）より引用[9]
iii. 主フット（$\boxed{\sigma^{\times}}$）決定	<$\boxed{\text{mɪ}}$.sə.><$\boxed{\text{sɪ}^{\times}}$.pi.>	
iv. アクセント付与	mɪ.sə.sɪ́.pi.	

英語では拍（μ）ではなく音節（σ）がフットを形成する。この例ではまず（8i）から（8ii）にかけて語内に 2 音節の集合による強弱フットが 2 つ形成される。次に（8iii）で主フットが決定される。この語例においては最右端のフット <$\boxed{\text{sɪ}}$.pi.> が主フットに選ばれる。そして最後に（8iv）でその主フット内のフット主要部 /sɪ/ にアクセント（第 1 強勢）が置かれる。

本論文では横手市方言においてもこのフットが下がり目の位置を決定すると考える。具体的には，横手市方言でも韻律語内にフットが形成され，各フット内で主要部が決定される。そしてそのフット群のうち 1 つが主フットとなり，語幹が有核動詞の場合は以下の（9）の規則により主フットのフット主要部に下がり目が置かれると考える。

(9)　下がり目付与規則：語幹が有核である場合，主フットのフット主要部に下がり目 (') を付与せよ。

なお，先の英語の例では 2 音節が 1 フットを形成していたが，拍と音節どちらがフットを形成するかはその言語が選択する（普遍文法内の）パラメーターの値によって異なる。例えば，日本語・琉球語諸方言では 2 拍フットを基調とする分析が展開されている（Poser 1990, Shimoji 2009, Poppe 2016, Itô and Mester 2016 など）。本論文では日本語諸方言の 1 つである横手市方言もこれらと同様のフットをもつと考え原則 2 拍が 1 フットを形成すると仮定する[10]。また，拍か音節かというパラメーターに加え，フットには以下のようなパラメーターが関与する。

(10)　フットに関するパラメーター（Hayes 1995: 54, 87 より）
　a.　フット解析の方向：右から左か，左から右か。
　b.　単項フット（拍がフットを形成する言語における 1 拍フット, 音節がフットを形成する言語における 1 音節フット）を認めるか否か。
　c.　フットの主要部の位置：右端（弱強フット）か，左端（強弱フット）か。

次節以降では，（10）のパラメーター指定をしつつ，過去形において語幹側に下

[9] Hayes（1995）では括弧つき格子（Bracketed Grid）という表示を派生表示に用いており，$\boxed{\times}$ などの記号は用いていないが，本論文では紙幅の都合上 $\boxed{\times}$ などの記号を用いることにする。

[10] 秋田方言を含む東北方言はシラビーム方言（柴田 1962: 141）と呼ばれ，拍という韻律範疇が存在しないとされている。これを反映した場合，本論文の規則群は，「軽音節 2 つ，または重音節 1 つが 1 フットを形成する」のように拍を参照しない形になる。

がり目が置かれているもの，すなわち，2 拍以上の母音語幹，/s/ 語幹，/k, g/ 語幹動詞の過去形（例 /oki-ta/‘起きた’，/otosi-ta/‘落とした’，/kai-ta/‘書いた’）の分析を行う。その後促音便，撥音便が起きる語幹，1 拍母音語幹，カ行変格語幹，という順番で分析を進める。

4.2. 2 拍以上の母音語幹動詞，/s/ 語幹動詞，/k, g/ 語幹動詞の過去形

まず [ogi'-da] /oki-ta/‘起きた’と [odo'si̥-ta] /otosi-ta/‘落とした’から始める。これらはどちらも /-ta/ に先行する要素（/oki, otosi/）が 2 拍以上であり，開音節で終わっている点で共通しているが，[odo'si̥-ta] では /i/ が無声化している。

母音の無声化とアクセントに関して，Haraguchi（1991: 16）では，アクセントが付与された拍内で無声化が起きた場合，アクセントはその拍から隣接する別の拍に移動するという分析がなされている。また, このようなアクセントの移動に関して，Hayes（1995: 42, 234）では，フット内での移動というものが仮定されている。これらを考慮すると，/otosi-ta/ は規則によって /oki-ta/ 同様，-2 に下がり目が置かれるが，その後の派生過程で無声化が起きた結果下がり目がフット内で移動し，-3 に下がり目が生じたと想定することができる（otosi'-ta → [odo'si̥-ta]）。本論文ではこのようなフット内での移動を起こす以下の規則を提案する。

（11）　下がり目移動規則：下がり目が置かれている拍が無声化した場合，下がり目を当該の拍が属するフット内で移動させよ。
例 $<CV_{\mu}CV_{[-voiced]\mu}'> \rightarrow <CV_{\mu}'\ CV_{[-voiced]\mu}>$

このように考えると，/otosi-ta/ は /tosi/ の部分が 1 フットを形成していることになる。しかし, 単純に左から, あるいは右から 2 拍ずつを 1 フットにしていった場合，<oto><si-ta> というフットを形成してしまい，/tosi/ が 1 フットを形成しない。そこで本論文では「フット形成は右から左に行われる」という（10a）に関するパラメーター指定をしたうえで，以下の 2 つの規則を提案する。

（12）　フット写像規則：語幹末母音を含む音節の右端にフット境界を挿入せよ。
例 1　CV.-CV. → CV.>-CV，例 2　CV. C-V. → CV.> C-V.

（13）　フット形成規則：フット境界を基準に，韻律語内の 2 拍を反復的に右から左にフットにまとめよ。　例　μμμμ>-μ → μμ<μμ>-μ → <μμ><μμ>-μ

（12）の規則は語幹末という形態構造にも依拠して韻律範疇を決定する規則である [11]。なお，ここでいう語幹末母音とは挿入母音 /i/ も含む /-ta/，/-(r)u/ からみて直前の母音のことである。この規則により，/oki-ta/，/otosi-ta/ では oki>-ta，otosi>-ta

[11]（12）の規則は形態論的境界（語幹末）と音韻論的境界（フット境界）を可能な限り一致させようとする規則である。このような考えは McCarthy and Prince（1993）の整列理論（Alignment theory）で展開されている。

というフット境界が形成される。そしてこの境界を基準に（13）の規則が適用され，<oki>-ta，o<tosi>-ta となる。

この <oki>-ta，o<tosi>-ta では /-ta/ や /o/ のように 2 拍フットを形成していない 1 拍が存在している。これらの拍が単項フットを形成するか否かは（10b）のパラメーター指定に依存する。ここで，/mi/ [mi'] ‘（「見に行く」などの）見’ のような 1 拍母音語幹動詞の連用形をみると，これは 1 拍しかないため 2 拍フットを形成できない。仮にパラメーターが単項フットを認めないと指定されている場合，/mi/ はフットを形成しない。すなわち /mi/ が主フットになる可能性，およびそれに下がり目が付与される可能性がないことになる。しかし，実際には下がり目は /mi/ に問題なく付与される。これは [mi'=sa] ‘見に’ のように接語を接続することで確認できる。また，/kat-ta/ ‘勝った’，/yoN-da/ ‘読んだ’ など次節で扱う促音便，撥音便が起きる語幹をみると，これらではここまでで提案した規則によれば <kat>-ta, <yoN>-da というフットが形成される。ここで /ta/（/da/ も含む）が単項フットを形成しないとすると，これも下がり目が生じる可能性はないことになる。しかし，実際にはこれらでは [kat-ta']，[jon-da'] のように /-ta/ に下がり目が生じる。このような /mi/ や /ta/ の振る舞いをみる限り，/mi/，/ta/ は単項フットを形成し，それが <$\boxed{\text{mi}^{\times}}$>，<$\boxed{\text{ta}^{\times}}$> のように主フットとなることで下がり目が生じたと考えられる。そこで，本論文では「単項フットを認める」という（10b）に関するパラメーター指定をしたうえで以下の規則を提案する。

（14）　単項フット形成規則：韻律語内の 2 拍フットを形成していない 1 拍を単項フットとせよ。

このパラメーター指定と（14）の規則により，<oki>-ta，o<tosi>-ta の /o/ や /-ta/ は単項フットを形成する。すなわちこれらの語例は <oki>-<ta> という 2 つのフット，<o><tosi>-<ta> という 3 つのフットをそれぞれもつことになる。そしてこのような語内の複数のフットのうち，いずれかが主フットになる。これらでは [ogi'-da], [odo'si̥-ta] というアクセントパターンになるので，/ki/, /to/ を含む <oki> と <tosi> が主フットになっていると考えられる。この主フットに関して，ここでは暫定的に「語幹末母音を含むフット（語幹末フット）を主フットとせよ」という主フット決定規則を仮定しておく。主フットについての具体的な議論は次節で行うことにし，ここではそれより先に（10c）に関するパラメーター指定を行う。

先の暫定規則によれば <oki>，<tosi> が主フットになる。これらが仮に強弱フットだとすると，それぞれ /o/，/to/ が主要部となりここに下がり目が置かれることになる（<o'ki>，<to'si>）。しかし，それでは /o'ki-ta/ のように -3 に下がり目が生じる誤ったアクセントパターンが導き出されてしまう。そこで本論文では「フットは弱強フットである」という（10c）に関するパラメーター指定をしたうえで以下の規則を提案する。

（15）　フット主要部形成規則：フットの右端の拍を主要部とせよ。

これにより，<oki>，<tosi> はそれぞれ <o[ki]>，<to[si]> となる。また，<o>，<ta> などの単項フット内の拍はフットの左端の拍でもあるが，同時に右端の拍でもあるので，（15）の規則によりこれ自身がフット主要部となる。先の暫定的な主フット決定規則も合わせると，これらは <o[ki×]>-<[ta]>，<[o]><to[si×]>-<[ta]> というフット構造をもつことになる。

このフット構造はこれらのアクセントパターンを的確に導くことができる。まず，<o[ki×]>-<[ta]> は主フットのフット主要部 /ki/ に下がり目が置かれることで正しいパターンが導き出される。さらに <[o]><to[si×]>-<[ta]> は一旦 /si/ に下がり目が置かれるものの，無声化が起きた後に（11）の規則により /to/ に下がり目が移ることになるため，こちらでも正しいアクセントパターンが導き出される（<tosi'> → <to'si̥>）。また，ここまでで提案した規則群により，/kai-ta/‘書いた’などの /k, g/ 語幹動詞の過去形も説明できる。/oki-ta/, /otosi-ta/, /kai-ta/ の派生をまとめると，以下のようになる。

（16）　2 拍以上の母音語幹動詞，/s/ 語幹動詞，/k, g/ 語幹動詞の過去形の派生過程

	a. /oki-ta/	b. /otosi-ta/	c. /kai-ta/
i. フット写像・形成（12），（13），（14）	<oki>-<ta>	<o><tosi>-<ta>	<kai>-<ta>
ii. フット主要部形成（15）	<o[ki]>-<[ta]>	<[o]><to[si]>-<[ta]>	<ka[i]>-<[ta]>
iii. 主フット決定（暫定規則：語幹末フットを主フットとせよ。）	<o[ki×]>-<[ta]>	<[o]><to[si×]>-<[ta]>	<ka[i×]>-<[ta]>
iv. 下がり目付与（9）	<oki'>-<ta>	<o><tosi'>-<ta>	<kai'>-<ta>
v. 母音の無声化と下がり目移動（11）（子音の有声化は捨象する。）	不適用	<o><to'si̥>-<ta>	不適用

ここまでの規則により，本節で対象とした動詞語幹のアクセントパターンは導かれるわけだが，次節に移る前に，/toosi-ta/ [to:'si̥ta]‘通した’のような語幹末音節の直前が重音節である語幹について触れておきたい。/toosi-ta/ の場合，ここまでの規則に従えば <to><o.si.>-<ta> というフットが形成される。しかしこの場合，/too/ という音節内部にフット境界が生じてしまう。これを防ぐためには <too.si.> という 3 拍フットを形成する規則，あるいは <too.><si.> のように /o/ と /s/ の間にフット境界を設ける規則が必要になる。<too.si.> というフット形成を仮定すると（11）の規則によって長母音に下がり目が置かれることが説明できる（<too.si̥'.> → <too'.si̥.>）。一方で <too.><si.> というフット形成を仮定するとフット境界をまたいだ下がり目移動を仮定する必要が出てくる。横谷（1997: 58–59）では 2 フットの集合からなる大フットと呼ぶ韻律範疇を仮定し，無声化による下がり目の移動はこの大フッ

トのレベルで行われるとしている。横谷（1997: 58–59）によれば大フットは形態素境界をまたいで形成されることはないので，<too><si>-<ta> であれば <too> と <si> が大フットを形成することになる。そして下がり目はフット内で移動させられない場合，大フット内で別のフットの主要部に移動すると考えれば，/too/ に下がり目が置かれることが説明できる。<too.si.> と <too.><si.> どちらの分析が妥当であるかは現時点では明らかではない。ただし，<too.><si.> のように 3 拍フットを形成しない立場をとったとしても，音節内部にフット境界が生じることを認めない立場をとる限り，/toot-ta/ [to:t-ta']‘通った’の /toot/ のような超重音節においては 3 拍フットが形成されると考える必要があるだろう（<toot>-<ta>）。

次節では，本節で暫定的なものにした主フット決定規則についての議論とともに，過去形において促音便，撥音便が起きる語幹（/t, w, r, m, b, n/ 語幹）の分析を行う。

4.3. /t, w, r, m, b, n/ 語幹動詞の過去形

ここでは /kat-ta/‘勝った’，/yoN-da/‘読んだ’を例に議論を進める。これまでの規則に従うとこれらでは <ka$\boxed{\text{t}}$>-<$\boxed{\text{ta}}$>，<yo$\boxed{\text{N}}$>-<$\boxed{\text{da}}$> というフットが形成され，語幹末フットにあたる <ka$\boxed{\text{t}}$>，<yo$\boxed{\text{N}}$> が主フットになるはずである。しかし，実際には [kat-ta'], [jon-da'] のように -1 に下がり目が生じるので，<$\boxed{\text{ta}}$>，<$\boxed{\text{da}}$> が主フットになっている。すなわち前節で仮定した「語幹末フットを主フットとせよ」という暫定規則では <kat>-<ta'>，<yoN>-<da'> というアクセントパターンは導けないことになる。

これらの語例に対する分析案として，<kat-$\boxed{\text{ta}}$> のように語幹と接辞がまとまった 3 拍フットが形成されているとするものがありうる。しかし，なぜこれらに限って例外的に 3 拍フットが形成されるのか，その動機が見当たらない。また，/toot-ta/ [to:t-ta']‘通った’のような超重音節 /toot/ を含む語例で <kat-$\boxed{\text{ta}}$> のようなフット形成を仮定する場合，<to><ot-ta> では音節内部にフット境界が生じるため，3 拍フットだけでなく，<toot-ta> という 4 拍フットも認めざるを得なくなるという問題が生じる。よってこの分析案は棄却する。

前節で扱った <oki'>-<ta> と無声化前の <o><tosi'>-<ta> では語幹末拍に下がり目が与えられていた。そして本節における <kat>-<ta'>，<yoN>-<da'> では語幹末拍ではないが，語幹末に隣接する接尾辞内の拍に下がり目が生じている。このようにアクセントによる卓立を形態素境界付近（ここでは語幹末付近）に置こうとする性質は東京方言の動詞のアクセント（Kubozono 2008: 182, Yamaguchi 2010: 4）でも指摘されており，横手市方言も同様の性質をもつことがこれら 4 例から窺える。

また，<ka$\boxed{\text{t}}$>-<$\boxed{\text{ta}}$>，<yo$\boxed{\text{N}}$>-<$\boxed{\text{da}}$> は語幹末拍が子音拍である。2 節で述べたように，同方言では子音拍に下がり目は置かれない。このことから，[kat-ta'], [jon-da'] というパターンは「語幹末付近の適切な拍」に下がり目を置こうとした結果生じたと考えられる。すなわち，下がり目は基本的に <oki'>，<tosi'> のように語幹末拍に置かれるが，語幹末拍が子音拍である場合，それは下がり目の付与先として不適格

である。そのため <ka[t]>-<[ta]>，<yo[N]>-<[da]> では語幹末付近にあるもう一つの拍である接尾辞側の拍，つまり /ta, da/ に下がり目が置かれるのである。

このようなプロセスは，例えば「語幹末拍が子音拍である場合，接尾辞側の拍に下がり目を付与せよ」とするような下がり目指定段階の規則を提案することで捉えられる。しかし，本論文では子音拍は下がり目の付与先だけでなく，そもそもフット主要部にもなれないと考え，以下の（17）の規則を提案し，さらに前節で暫定的なものにした主フット決定規則を（18）のように形式化する。

（17）　フット主要部変換規則：フットの右端の拍が子音拍である場合，左端の拍を主要部とせよ（すなわち例外的に強弱フットを形成せよ）。
　　例 <CV[C]>　→　<[CV]C>

（18）　主フット決定規則：下記方策に基づき，主フットを決定せよ。
　　方策 1：語幹末に最も近いフット主要部を探し，それが属するフットを主フットとせよ（例 <[μ]μ>-<[μ]>　→　<[μ]μ>-<[$μ^{×}$]>）。ただしそのようなフットが複数ある場合，下記の方策をとれ。
　　方策 2：当該のフット内拍数が異なる場合，2 拍フットを主フットとせよ。
　　例 1 <μ[μ]>-<[μ]>　→　<μ[$μ^{×}$]>-<[μ]>，
　　例 2 <[μ]>-<[μ]μ>　→　<[μ]>-<[$μ^{×}$]μ>
　　方策 3：当該のフット内拍数が等しい場合，語幹側のフットを主フットとせよ。
　　例 3 <μ[μ]>-<[μ]μ>　→　<μ[$μ^{×}$]>-<[μ]μ>，
　　例 4 <[μ]>-<[μ]>　→　<[$μ^{×}$]>-<[μ]>

（17）の規則は子音拍がフット主要部になることを回避する規則である[12]。この規則を採用すると，/kat-ta/, /yoN-da/ では <[ka]t>-<[ta]>, <[yo]N>-<[da]> というフット形成がなされる。この場合，<[ka]t> と <[yo]N> の主要部である /[ka]/, /[yo]/ は音節末子音 /t/，/N/ の存在により語幹末に隣接しておらず，<[ta]>, <[da]> が唯一の語幹末に最も近いフット主要部ということになる。そのため（18）の方策 1 によりこれらが主フットとなり，最終的に [kat-ta'], [jon-da'] というアクセントパターンが現れる。また，本節冒頭で言及した /toot-ta/ [to:t-ta'] ‘通った’ も（17）の規則を含めると <[to]ot>-<[ta]>，あるいは 3 拍フットを認めない立場であれば <[to]><[o]t>-<[ta]> というフットが形成される。これらはいずれも（18）の方策 1 により <ta> が主フットになるため，[to:t-ta'] という正しいパターンが導かれる。

このように本論文では促音と撥音では下がり目の移動ではなく強弱フットの形成が起きると考え，前節で扱った無声化母音では下がり目付与の後に下がり目の移動が起きると考える。つまり，本論文の分析に従えば無声化母音は促音や撥音よりも

[12] 同じ特殊拍でも /kai-ta/ の /i/ はフット主要部になれることから，同方言では母音に比して聞こえ度が低いという性質をもつ子音拍のみがフット主要部になれないのだと言える。

後の段階でアクセントに関する変化が起きていることになる。このようなタイミングのずれが生じるのは，無声化母音が音韻論的には母音であり，下がり目を担う資格があるものの，無声化という音声学的な要因によってその資格を失う一方で，促音や撥音は基底形から音声形に至るまで一貫して子音であり，派生の初期段階から下がり目を担えないことが明白であるという違いがあるためだと考えられる。

<ka t>-<ta>，<yo N>-<da> は（18）の方策 1 で主フットが決まるが，<o ki>-<ta>，<o><to si>-<ta> は方策 1 では主フットは決まらない。それぞれ /ki/ と /ta/，/si/ と /ta/ というように語幹末に最も近いフット主要部が複数存在するためである。このような場合は方策 2, 3 で主フットが決まる。それぞれが属するフットの拍数が異なる場合，方策 2 により 2 拍フットが主フットに選ばれる。そして拍数が等しい場合には方策 3 により語幹側のフットが主フットとなる。方策 2 がとられるのは 2 拍フットがフットとしてより的確な形をもつためである。そして方策 3 がとられるのは，主フットは韻律語内に 1 つのみ存在する点で他のフットに比して有標であり，かつ Beckman（1998: 1, 191）が述べるように，通言語的に語幹は接辞に比して有標な構造の出現を認めるためである。

<o ki>-<ta>，<o><to si>-<ta> は方策 2 の例 1 に該当し，2 拍フットが主フットに選ばれる（<o ki>-<ta> → <o ki×>-<ta>，<o><to si>-<ta> → <o><to si×>-<ta>）。これにより /ki/，/si/ に下がり目が付与され的確なアクセントパターンが導かれる（/si/ では下がり目付与後，無声化と下がり目移動が起きる）。なお，厳密にいうと，動詞だけを考慮した場合は（18）の方策 2, 3 ではなく，方策 1 の後に「語幹側のフットを主フットとせよ」という方策があれば事足りる。また，（17）についても，（17）の提案直前に述べたように，下がり目指定段階の規則を導入すれば <ka t>-<ta>, <yo N>-<da> のアクセントの説明は済む。それでもなお（17）の規則と（18）の方策 2, 3 を提案するのは，これらを採用することで形容詞のアクセントを捉えることができるためである。これについては 5.1. 節で再度述べる。

次節では 1 拍母音語幹と変格活用語幹（/de-ta/‘出た’, /ki-ta/‘来た’）をみる。

4.4. 1 拍母音語幹動詞とカ行変格語幹動詞の過去形

本論文では横手市方言において単項フットは認められるとしているが，Hayes（1995: 87）は単項フットに対して Weak prohibition という考えを提案している。これは端的に述べれば，単項フットが認められる言語であっても，それが認められるのはその単項フットにアクセントが置かれているときのみであり，アクセントが置かれていない場合は，その単項フットの削除が行われる，とするものである。これに従えば，<o ki×>-<ta> などでは最終的には <ta> のフットが削除され <o ki×>-ta のようになるが，本論文では語例の表示においては単項フットを残しておく。むしろ，ここで強調したいのは，単項フットを認める言語であっても，その存在は限られた場合でのみ許され，なるべく避けられるべきだとされていることである。

このような考えを踏まえた上で，[de-da'] /de-ta/‘出た’の分析に移る。(12) の写像規則に従えば，/de-ta/ はフット境界が de>-ta のように形成され，2 拍フットを形成できないがゆえに (14) の規則により <de>-<ta> となる。しかし，この構造で憂慮されるのは，2 拍あるにも関わらず，2 拍フットが全くなく，本来避けられるべき単項フットが連続して現れていることである。加えて，この構造は誤ったアクセントパターンを予測する。(18) の規則によれば <de>-<ta> は接辞境界に隣接する両端のフットの拍数が等しいため，方策 3 により <de> が主フットとなり /de'-ta/ となることが予測されるが実際には /de-ta'/ となる。

<de>-<ta> ではなく，<de-ta> のように全体が 2 拍フットを形成していると考えれば単項フット連続は現れなくなる。また，このフット形成であれば横手市方言のフットは弱強フットであるので，<de-ta×> となり下がり目が -1 に現れることも説明することができる。本論文では 1 拍母音語幹ではこのようなフット形成が起きると考え，以下の規則を提案する。

(19)　フット境界削除規則：韻律語内に単項フット 2 つのみが存在する場合，それらの間にあるフット境界を削除し 2 拍フットとせよ [13]。

$[\langle\mu\rangle\langle\mu\rangle]^{\text{韻律語}} \rightarrow [\langle\mu\ \mu\rangle]^{\text{韻律語}}$

この規則を導入することにより，単項フットの表出を抑え，かつ 1 拍母音語幹動詞の過去形のアクセントパターンを説明することができる。また，3 節で示した通り，カ行変格動詞の過去形のアクセントパターンは 1 拍母音語幹と同じであるため，こちらも <ki-ta×> というフット形成によりそのパターンが説明可能となる ([kiᵒta'] ‘来た’)。以下に /de-ta/ の派生過程に加え，前節で扱った /kat-ta/‘勝った’の派生過程を合わせて示しておく。

次節では非過去形のアクセントパターンをみていく。

(20)　/de-ta/，/kat-ta/ の派生過程

	a. /de-ta/	b. /kat-ta/
i. フット写像・形成 (12)，(13)，(14)	<de>-<ta>	<kat>-<ta>
ii. フット境界削除 (19)	<de-ta>	不適用
iii. フット主要部形成 (15)	<de-ta>	<kat>-<ta>
iv. フット主要部変換 (17)	不適用	<kat>-<ta>
v. 主フット決定 (18)	<de-ta×>$_{\text{方策 1}}$	<kat>-<ta×>$_{\text{方策 1}}$
vi. 下がり目付与 (9)	<de-ta'>	<kat>-<ta'>

[13] (19) の規則は一旦作った構造を作り直す規則であるが，このような過程を想定することの妥当性について検討すべきと第 2 査読者からご指摘いただいた。これに類する規則は五十嵐 (2015: 10) においても韻律語境界に対して想定されているところではあるが，その妥当性については今後検討していきたいと考えている。

4.5. 非過去形

まず，/oki'-ru/ [ogi'-ru]‘起きる’などの 2 拍以上の母音語幹動詞の非過去形であるが，これはその過去形 /oki'-ta/ [ogi'-da]‘起きた’と音節構造と下がり目の位置が同じであるため，<o ki× >-< ru > のようにこれまでの規則によって説明が可能である。しかし，1 拍母音語幹動詞と子音語幹では問題が起きる。/de-/‘出る’と /hatak-/‘はたく’を例に挙げると，まず，/de-ru/ では前節の <de-ta> 同様 <de- ru > というフットが形成され，-1 に下がり目が生じると予測されるが，実際は [de'-ru] のように -2 に下がり目が生じる。また /hatak-u/ ではここまでの規則に従えば <ha ta ><k-u > というフットが形成される。<ha ta ><k-u > において語幹末に最も近いフット主要部はそれを内包する <k-u > であるため，これに下がり目が生じると予測されるが，実際は /hata'k-u/ [hada'g-u] のように -2 に下がり目が生じる。

ここで /-ta/ と /-(r)u/ を比べると，子音の違いもあるが，母音の高低が異なることに気づく。/-ta/ は非高舌母音をもち，/-(r)u/ は高舌母音をもつ。このような母音の舌の高低とアクセントという観点で日本語諸方言の先行研究をみると，上野（2003: 79）や Nitta（2001）では雫石町方言や松江方言，金沢方言など，高舌母音を含む拍に卓立を置くことを避ける方言の存在が指摘されている。これを考慮すると，横手市方言でも高舌母音を含む拍に下がり目（卓立）を置くことを避けた結果，/-(r)u/ に下がり目が生じないと考えることができる。事実，このように高舌母音に下がり目を置くことを避ける性質，及びそれによる非高舌母音との差異は横手市方言の他の動詞活用にもみられる。例えば，横手市方言には /-ta/ 同様，非高舌母音をもつ接尾辞として副動詞形接尾辞 /-te/ が，/-(r)u/ 同様，高舌母音をもつ接尾辞として連用形接尾辞 /-i/ があるが，これらは表 6 に示すようにそれぞれ /ta/, /-(r)u/ と同じアクセントパターンを示す。すなわち，非高舌母音には表 6 の c にある /yoN-de'/ のように下がり目が生じうる一方で，高舌母音には下がり目は生じない [14]。ただし，/oki'-ru/‘起きる’の /ki'/ の様に，横手市方言では語幹内の高舌母音は下がり目を担うことができるため，横手市方言は「接尾辞内の高舌母音」に限定して下がり目を置くことを避けていることになる。

表 6　副動詞形と連用形のアクセントパターン

		副動詞形 /-te/	連用形 /-i/
a. /s/ 語幹	/das-/‘出す’	da'si-te (-3)	da's-i, *das-i' (-2)
b. /k, g/ 語幹	/kak-/‘書く’	kai'-te (-2)	ka'k-i, *kak-i' (-2)
c. /t, w, r, m, b, n/ 語幹	/yom-/‘読む’	yoN-de' (-1)	yo'm-i, *yom-i' (-2)

高舌母音は非高舌母音に比して口腔内の狭窄の程度が大きく，その点で子音と類似する。また，Beckman（1998: 1, 191）は接辞は語幹に比して有標な構造が現れに

[14] 副動詞形における -1 の下がり目は接語 /=yo/‘よ（終助詞）’を接続させることで，連用形における -1 の下がり目は接語 /=sa/‘〜に（格助詞）’を後続させることで確認した。

くい性質をもつと述べている。下がり目をもつ拍を有標な構造とすると，横手市方言で接尾辞内の高舌母音に下がり目を置くことが避けられるのは，高舌母音の子音との類似性と，有標な構造が現れにくいという接辞の性質の 2 要素が合わさった結果だとみることができる。

この /-(r)u/ に下がり目を置くことを避ける性質を反映した規則として，<de-ru> に対してであれば，（11）の下がり目移動規則に類する規則（<de-ru'> → <de'-ru>）などが提案できる。しかし，<hata><k-u> の場合，<k-u> はフット内に下がり目の移動先となる拍をもたないためこの規則は有効ではない。そのため，こちらに対しては例えば，<k-u> を（18）の主フット決定規則の対象から除外せよ，とする規則が必要になる。しかし，これでは動詞ごとに別個に規則を立てて説明を与えることになってしまう。本論文では一括して非過去形のアクセントパターンを導く規則として，韻律外（extrametrical）要素という概念を導入した以下の（21）を提案する。

（21）　韻律外要素形成規則：屈折接尾辞内の高舌母音を含む拍を韻律外（{ } で囲んで表記する）とせよ。

韻律外とは Hayes（1995: 56–61）で仮定されているフット形成から除外される要素のことを指す。この規則に従えば，/de-ru/, /hatak-u/ では <de>-{ru}, <hata>{k-u} のように /-(r)u/ を含む拍がフット形成から除外された後にフット形成が起きる。そして語幹末に最も近いフット主要部である /de/, /ta/ に下がり目が置かれ /de'-ru/, /hata'k-u/ のような -2 に下がり目が置かれるパターンが導き出される。また，上では /oki'-ru/ [ogi'-ru]‘起きる’のような 2 拍以上の母音語幹について，これまでの規則で説明可能としたが，正確には /oki'-ru/ でも（21）の規則が適用され -2 に下がり目が生じることになる（<o $\boxed{\text{ki}^{\times}}$>-{ru} → <oki'>-{ru}）。

このように /-(r)u/ を韻律外要素と考えることで，全ての動詞の非過去形のアクセントパターンを一括して説明することが可能になる。本論文の提案に基づけば，横手市方言の非過去形が一貫したパターンを示すのは，下がり目移動規則（<de-ru'> → <de'-ru>）や過去形と同じ規則（<o $\boxed{\text{ki}^{\times}}$>-<ru>）のような別個のプロセスによって偶発的にそうなったのではなく，おしなべて（21）により /-(r)u/ を含む拍が韻律外となり，その直前のフットが主フットに選ばれたためであるということになる。

ここまでで，全ての動詞の過去形と非過去形のアクセントパターンを導く規則を提案した。以下の（22）に本論文で提案した全ての規則群を示す形で非過去形の派生過程を示す。また，（23）には同様の形で過去形の派生過程を再掲する。

（22）　非過去形の派生過程　例 /de-ru/‘出る’, /oki-ru/‘起きる’, /hatak-u/‘はたく’

	a. /de-ru/	b. /oki-ru/	c. /hatak-u/
i. 韻律外要素形成（21）	de-{ru}	oki-{ru}	hata{k-u}
ii. フット形成（12），（13），（14）	<de>-{ru}	<oki>-{ru}	<hata>{k-u}
iii. フット境界削除（19）	不適用	不適用	不適用
iv. 主要部形成（15）	<$\boxed{\text{de}}$>-{ru}	<o$\boxed{\text{ki}}$>-{ru}	<ha$\boxed{\text{ta}}$>{k-u}
v. 主要部変換（17）	不適用	不適用	不適用
vi. 主フット決定（18）	<$\boxed{\text{de}^{\times}}$>-{ru}$_{\text{方策 1}}$	<o$\boxed{\text{ki}^{\times}}$>-{ru}$_{\text{方策 1}}$	<ha$\boxed{\text{ta}^{\times}}$>{k-u}$_{\text{方策 1}}$
vii. 下がり目付与（9）	<de'>-{ru}	<oki'>-{ru}	<hata'>{k-u}
viii. 母音の無声化と下がり目移動（11）（子音の有声化は捨象する。）	不適用	不適用	不適用

（23）　過去形の派生過程　例 /de-ta/‘出た’, /kat-ta/‘勝った’, /otosi-ta/‘落とした’

	a. /de-ta/	b. /kat-ta/	c. /otosi-ta/
i. 韻律外要素形成（21）	不適用	不適用	不適用
ii. フット形成（12），（13），（14）	<de>-<ta>	<kat>-<ta>	<o><tosi>-<ta>
iii. フット境界削除（19）	<de-ta>	不適用	不適用
iv. 主要部形成（15）	<de-$\boxed{\text{ta}}$>	<ka$\boxed{\text{t}}$>-<$\boxed{\text{ta}}$>	<$\boxed{\text{o}}$><to$\boxed{\text{si}}$>-<$\boxed{\text{ta}}$>
v. 主要部変換（17）	不適用	<$\boxed{\text{ka}}$t>-<$\boxed{\text{ta}}$>	不適用
vi. 主フット決定（18）	<de-$\boxed{\text{ta}^{\times}}$>$_{\text{方策 1}}$	<$\boxed{\text{ka}}$t>-<$\boxed{\text{ta}^{\times}}$>$_{\text{方策 1}}$	<$\boxed{\text{o}}$><to$\boxed{\text{si}^{\times}}$>-<$\boxed{\text{ta}}$>$_{\text{方策 2}}$
vii. 下がり目付与（9）	<de-ta'>	<kat>-<ta'>	<o><tosi'>-<ta>
viii. 母音の無声化と下がり目移動（11）（子音の有声化は捨象する。）	不適用	不適用	<o><to'si̥>-<ta>[15]

次節では動詞過去形，非過去形以外の活用のアクセントパターンをみる。

5. 動詞過去形・動詞非過去形以外の活用

本節では，動詞同様活用が起きる形容詞のアクセントパターン，および過去形，

[15] Haraguchi（1991: 16, 64）は東京方言では母音の無声化により主要部の移動が起きることで結果として下がり目が移動するとしている。一方，本論文では母音の無声化によって起きるのはあくまで下がり目の移動であり主要部が移動するとは想定していない。仮に無声化により下がり目だけでなく主要部が移動するとしても（23 viii）の段階ではそれはアクセントに影響を与えず正しいアクセントパターンが導き出される。ただし，無声化により主要部移動が起きるとした場合，無声化規則は主フット決定規則の方策 1 と反供給（Counterfeeding）の関係にあることになる。仮に無声化と主要部移動が主フット決定に先行する場合，<$\boxed{\text{o}}$><$\boxed{\text{to}}$si̥>-<$\boxed{\text{ta}}$> という構造が作り出され，その後方策 1 が適用され <$\boxed{\text{o}}$><$\boxed{\text{to}}$si̥>-<$\boxed{\text{ta}^{\times}}$> となるためである。この反供給の関係にあることについては第 2 査読者よりご指摘いただいた。

非過去形以外の動詞活用のアクセントパターンをみる。そして本論文で提案した規則群で説明可能な活用と検討課題を残す活用について述べる。なお，これ以降語例は全て音素表記のみとし，主フットの表示（×）を省略し直接下がり目を表記する。また，既出の語例と同じ，あるいは準ずるフット形成をもつ語例については，その語例の横に cf. を設け，既出語例の例文番号を示すことにする。

5.1. 形容詞のアクセントパターン

まず形容詞から論ずる。横手市方言の形容詞の概要を述べると，同方言の形容詞語幹は必ず /e, i/ のどちらかを末尾にもつ[16]。これは日高（2001: 81）の秋田方言全体の研究にもあるように，形容詞の非過去形接尾辞 /-i/ が語幹末母音と融合したためである。例えば，‘高い’，‘悪い’，‘遅い’はそれぞれ /take/（/taka-i/ > /take/），/wari/（/waru-i/ > /wari/），/ose/（/oso-i/ > /ose/）となる。これらの形容詞語幹は /take/‘高い’のように接尾辞を伴わずに非過去を表す。また，末尾の /e/ や /i/ はどのような活用でも融合前の母音連続に戻らないことから，/e/, /i/ のまま心的辞書に登録されていると考えられる。さらに，/take/, /wari/ は有核，/ose/ は無核，といったように有核か無核かの区別がある。

有核形容詞では（24），（25）に示すように基本的に語幹末に下がり目が生じる。これは本論文で提案した規則により，語幹末にフット境界が挿入された結果だとみることができる。

（24）　有核形容詞（1 拍）のアクセントとフット形成：/ne/‘ない’
　　a. 非過去形　<ne'>(=na=da)‘ない（のだ）’
　　b. 連用形　<ne'>-{ku}‘なく’：（21）により /-ku/ が韻律外になる。
　　cf.（22a）

（25）　有核形容詞（2 拍以上）のアクセントとフット形成：/take/‘高い’
　　a. 非過去形　<ta ke'>(=na=da)‘高い（のだ）’
　　b. 連用形　<ta ke'>-{ku}‘高く’：（21）により /-ku/ が韻律外になる。
　　cf.（22b）

しかし，以下に示す過去形はやや特殊な振舞いをみせる。

（26）　形容詞の過去形のアクセント
　　a. 1 拍語幹：neka' tta‘なかった’
　　b. 2 拍以上の語幹：take' katta(=na=da) ～ take' katta' (=na=da)‘高かった（のだ）’

/ne/ のように語幹が 1 拍の場合，語幹 /ne/ ではなく /ka/ に下がり目が生じる。また，

[16] /take/ や後の（27）にみる否定形接尾辞，希求形接尾辞の末尾の /e/ はやや広めの [ɛ] で実現することもあるが，調査した限りでは自由異音的に [e] も観察されたため，音素表記上も /e/ としておく。また，このような母音融合は，少なくとも /kai-ta/‘書いた’など，形態音韻論的プロセスによって生じる母音連続では観察されなかった（*[ke:da]）。

語幹が 2 拍以上の場合は，/take' katta/ のように語幹末のみに下がり目が生じるパターンだけでなく，/take'katta'/ のように末尾の /ta/ にも下がり目が生じるパターンが現れる。この /katta'/ の下がり目は /osekatta'(=na=da)/ ‘遅かった（のだ）’ のように無核形容詞でも現れ，無核形容詞におけるこの下がり目は義務的である。

過去形に現れる /katta/ は通時的にはカリ活用，すなわち連用形接尾辞 /-ku/ と動詞 /ar-/ ‘ある’ に遡ることができる。また，横手市方言の /ar-/ は有核であり，その過去形では促音便が起きるため，<a t>-<ta'> ‘あった’ のように -1 に下がり目が生じる。/take'katta'/ や /osekatta'/ の末尾の /ta/ で下がり目が生じるのは，この <a t>-<ta'> の名残だと考えられる。すなわち，/katta/ は，/kat-ta/ という 2 つの接尾辞の連続であり，/kat/ は /ar-/ の有核という情報を保持している。そして /kat/ が接尾辞でありながら有核語幹と同等の扱いを受けることで <ka t>-<ta> というフット形成，および /ta/ への下がり目付与が起きるのである。

さらに，<ka t>-<ta> というフット形成を仮定すると，（26a）/neka'tta/ ‘なかった’ にも説明を与えられる。/kat/ では（17）のフット主要部変換規則が適用され，<ka t> が <ka t> になっている（<ne>-<ka t>-<ta>）。この場合語幹末に隣接するフット主要部は /ne/ と /ka/ であり，（18）の方策 2 により 2 拍フットの <ka t> が主フットとなることで /neka'tta/ となる（（18）の例 2 に該当）。

仮に（17）の規則を仮定しなかった場合，<ka t> は <ka t> にならないため，フット主要部でない /ka/ に下がり目が付与されることが説明できない。また，（18）の方策 2, 3 を仮定せず，「（方策 1 で決まらなかった場合）語幹側のフットを主フットとせよ」という方策を仮定してしまうと /ne'katta/ という誤ったパターンが導かれてしまう。ゆえに 4.3. 節でも述べたように（17）の規則と（18）の方策 2 が必要となる。

この /neka'tta/ において末尾の /ta/ に下がり目が生じないのは，*/ne-ka't-ta'/ のように下がり目が連続することが忌避され，/ta/ の下がり目の削除が起きたためだと考えられる。語幹が 2 拍以上の場合における /take'katta/ のような /katta/ に下がり目が生じていないパターンも同じ理屈により生じたと考えられるが，こちらでは */ne-ka't-ta'/ ほどの隣接性はないことから /take'-kat-ta'/ も認められるのであろう。なお，<ka t> というフット形成は <ta ke>-<ka t>-<ta> のように語幹が 2 拍以上の場合も起きるが，これは（18）の方策 3 により語幹側にある <ta ke> が主フットとなる（（18）の例 3 に該当）[17]。このため，方策 2 同様，方策 3 もやはり必要となる。

/take'-kat-ta'/ のような複数の下がり目の生起には発話速度が関連しているようだが，まだ詳しい観察は行えていない。また，/kat/ が有核語幹のように振る舞うことを考慮すると，/take-kat-ta/ は語幹 /take/ から屈折接尾辞 /ta/ までが 1 つの韻律

[17] （18）提案以降から 5.1. 節までで，方策 2, 3 の例 1 から 3 に該当する語が出てきたが，例 4 に該当する語は出てきていない。これに該当する語としては 4.2. 節で述べた /toosi-ta/ [to:'s̬ita] ‘通した’ が挙げられる。これに対して <to o><si>-<ta> というフット構造を仮定する立場では /si/ が主フットになるためこれが例 4 に該当する。

語を形成しているのではなく，/take/ と /kat-ta/ という 2 つの韻律語を形成している可能性がある。しかし，/ne-kat-ta/ も /ne/ と /kat-ta/ という 2 つの韻律語に分かれているとすると /kat/ に /ne/ による下がり目が生じることが説明できなくなる。/ne/ が 1 拍という短さから例外的に /kat-ta/ と合わせて 1 韻律語を形成している可能性があるが，いずれにせよ，/kat/ のような語幹同等の振る舞いをするものを含め，語幹が連続する際の韻律語の規定については検討が必要である。

5.2. 他の動詞活用

/-ta/, /-(r)u/ 以外に調査した形式としては以下の（27）に示すものが挙げられる [18]。なお，/~/ は当該の接尾辞が派生接尾辞であることを示す。

（27）　a. 副動詞形 /-te/　b. 連用形 /-i/　c. 並列形 /-tari/　d. 受身形 /~(r)are/
e. 使役形 /~(s)ase/　f. 可能形 /~(r)e/[19]　g. 否定形 /~(a)ne/　h. 希求形 /~(i)te/
i. 命令形 /-(r)e/　j. 条件形 /-tara/

この内，（27a）と（27b）は表 6 に示したようにそれぞれ過去形，非過去形と同じパターンになる。これはそれぞれで過去形，非過去形と同じフットが形成されたためである。表 6 では子音語幹の例しか示さなかったが，母音語幹でも同じパターンとなる（例 <oki'>-<te>‘起きて’，<mi-te'>‘見て’，<kake'>(=sa)‘掛け（に）’，<mi'>(=sa)‘見（に）’，各々 cf.（16a），（23a），（25a），（24a））。

続けて（27c）/-tari/ は過去形と同じパターンになる。これは（21）の規則により /ri/ が韻律外になり，過去形と同じフットが形成されたためである（例 <oki'>-<ta>{ri}‘起きたり’，<yoN>-<da'>{ri}‘読んだり’各々 cf.（16a），（23b））。

次に，（27d–f）/~(r)are/，/~(s)ase/，/~(r)e/ であるが，これらは /mi~rare'-ta/‘見られた（受身）’，/mi~sase'-ru/‘見させる’，/mi~re'-ta/‘見られた（可能）’のように -2 に下がり目が生じ 2 拍以上の母音語幹と同じパターンを示す。これは（27d–f）が新たな動詞語幹を派生する派生接尾辞であり，これらの接尾辞を含んだ /mi~rare/，/mi~sase/，/mi~re/ 全体が語幹として扱われるためである（例 <mi>~<sare'>-<ta>，<mi~re'>-{ru} 各々 cf.（16a），（22b））。

---

[18] 東京方言であれば，意向を表す形式として /-(y)oo/ があるが，横手市方言ではこれは用いられず，/kak-u be/‘書こう’のように非過去形に推量，意向を表す /be/ を後続させることで意向を表す。ゆえに /-(y)oo/ は本論文では取り扱わない。なお，（27）に示した接尾辞は全て無核動詞に接続しても下がり目などは生じない。このことから，これらの接尾辞自体はアクセントに関する情報はもっていないと考えられる。

[19] 横手市方言では可能形接尾辞は /~(r)e/ であり，いわゆる「ら抜きことば」の形が同方言の可能形にあたる。これについては県内方言を広く扱った日高（2001: 103–104）にも記述があることから，この形が全県的かつ伝統的なのだと言える。なお，/~(r)e/ は能力可能を表し，状況可能を表さない。状況可能の肯定形は /-(r)u=ni e/（日高 2001: 103 によればこれは‘～するのによい’に由来する）で表され，否定形は /~(r)are~ne/ で表される。/-(r)u=ni e/ と /~(r)are~ne/ はそれぞれ非過去形接尾辞，否定形接尾辞が接続しているため，そのアクセントパターンはそれぞれ非過去形，否定形と同じになる。

さらに（27g, h）/~(a)ne/，/~(i)te/ では /oki~ne'(=na=da)/‘起きない（のだ）’，/oki~te'(=na=da)/‘起きたい（のだ）’のように当該の末拍に下がり目が生じる。/~(a)ne/, /~(i)te/ には /kat-ta/ などの形容詞の活用に現れる形態素が接続することから，これらは動詞語幹から形容詞語幹を作り出す派生接尾辞であると言える。形容詞では前節でみた /take'/ のように，語幹末に下がり目が生じるため，/~(a)ne/, /~(i)te/ で末拍に下がり目が生じるのは，これらの派生接尾辞により /oki~ne/，/oki~te/ 全体が形容詞語幹として扱われているためだと説明できる（例 <o><ki~ne'>，<o><ki~te'> ともに cf.（25a））[20]。

このように，（27a–h）はこれまでの規則で説明が可能であるが，残り 2 つの（27i, j）は検討すべき課題が残されている。まず，（27i）の命令形 /-(r)e/ をみる。これは /oki-re'(=yo)/‘起きろ（よ）’，/nom-e' (=yo)/‘飲め（よ）’のように /-(r)e/ に下がり目が生じる。これに対しては /-$\boxed{(r)e^{\times}}$/ のように主フットになることが基底の段階から指定されている，あるいはこれは（27d–h）同様，派生接尾辞（/~(r)e/）であり，当該の拍が語幹末拍として扱われているとすることで説明が可能になる。特に後者の派生接尾辞だという考えをさらに進めると，可能形接尾辞 /~(r)e/ は実際には命令形接尾辞でもある，という見方をすることで可能形と命令形に統一的な説明が与えられる。このように命令形と可能形を同一視する分析は近藤（2012）の男鹿市方言の研究でもなされているが，この考えの問題点としては‘来る’の命令形と可能形が挙げられる。同方言では‘来る’の命令形は例外的に /<koe'>/‘来い’という形式になる。命令形と可能形の形式が同一であれば可能形は /koe'-ru/‘来られる（可能）’が予測されるが実際には，/kore'-ru/ となる。そのため，この同一視する見方は再検討が必要である [21]。

最後に（27j）の条件形 /-tara/ をみる。これは /mi-ta'ra/‘見たら’/oki'tara/‘起きたら’，/yoNda'ra/‘読んだら’のように /-ta/ や /-tari/ と同じパターンになる。これに対しては，/-tara/ の /ra/ の部分が語彙的に韻律外と指定されている，あるいは，「2 拍以上の屈折接尾辞ではその末拍を韻律外とせよ」とするような規則により /ra/ が韻律外になると考えることで説明が可能になる。/ra/ が韻律外である /-ta{ra}/ という構造においては，/-ta/ や /-tari/ と同じフット形成が成されるためである（<mi-ta'>{ra}

[20] 否定形のアクセントパターンが形容詞と同じになる点は近藤（2016b: 39）にも言及がある。

[21] また，命令形のアクセントパターンの検討は，（27）では示していないものの，‘起きれば’などの仮定形にも関わる。なぜなら，同方言では /koe'ba/‘来れば’，/okire'ba/‘起きれば’，/nome'ba/‘飲めば’のように仮定形は命令形の形式に別形態素 /ba/ を接続させることで形成され，そのアクセントパターンは命令形と同じになるためである。このように命令形を基盤とすることから，（27）では仮定形を省いた。なお，/ba/ について，現代共通日本語では衣畑（2019: 71–72）も述べるように仮定形接尾辞は /-(r)eba/ であり，/ba/ という形態素はない。しかし，横手市方言では /ba/ という形式は /seNsei=daba/‘先生であれば’のようにコピュラの /da/ にも接続でき，/-(r)e/ に依存しない独立した振る舞いをみせる。このことから，同方言では /ba/ という独立した形態素があると考えられる。このような命令形と仮定形の形式の共通点に関する助言は，第 2 査読者よりいただいた。また，/daba/ という形式の存在は日高（2001: 97–98）でも述べられている。

‘見たら’，<yoN><da'>{ra}‘読んだら’，<oki'><ta>{ra}‘起きたら’各々 cf.（23a, b），（16a））。韻律外性を語彙的指定とするか，規則によるものとするか，あるいは別の分析が可能であるかは今後の検討課題である。

6. 結語

本論文では秋田県横手市方言の有核動詞の過去形，非過去形のアクセントパターンを整理し，それらのパターンを導く規則を提案した。同方言の有核動詞のアクセントは，過去形におけるそのパターンが多様である点，さらにその一方で非過去形では一貫したパターンが現れる点で特徴的である。本論文では弱強フットを中核とした規則群を提案することでこの過去形と非過去形のアクセントパターンが適切に導かれることを示した。また，検討課題が残されているものもあるが，本論文で提案した規則が形容詞のアクセント，および他の動詞活用のアクセントを説明するためにも有効であることを示唆した。

今後の課題としては 5 節内の検討課題の他に，外来語や複合名詞など，名詞のアクセントパターンに対する本論文の規則の有効性の検証が挙げられる。また，今回は規則ベースの記述を行ったが，制約ベースの記述であればどのような制約が考えられるか，そして規則ベースの記述と制約ベースの記述を対照した際に両記述の間にどのような優劣がみられるか，といった理論的な考察も今後検討したいと考えている。

参照文献

Beckman, Jill N. (1998) Positional faithfulness: An optimality theoretic treatment of phonological asymmetries. Unpublished doctoral dissertation, University of Massachusetts.

Haraguchi, Shosuke (1977) *The tone pattern of Japanese: An autosegmental theory of tonology*. Tokyo: Kaitakusha.

Haraguchi, Shosuke (1991) *A theory of stress and accent*. Dordrecht: Foris Publications.

Hayes, Bruce (1995) *Metrical stress theory*. Chicago: University of Chicago Press.

日高水穂（2001）「秋田方言の文法」秋田県教育委員会（編）『秋田のことば』74–132．秋田：無明舎出版.

五十嵐陽介（2015）「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』8: 1–42.

Itô, Junko and Armin Mester (2016) Unaccentedness in Japanese. *Linguistic Inquiry* 47: 471–526.

衣畑朋秀（編）（2019）『基礎日本語学』東京：ひつじ書房.

近藤清兄（2012）「秋田県男鹿方言動詞の命令形・仮定形について」『聖霊女子短期大学紀要』40: 47–60.

近藤清兄（2015）「秋田県男鹿方言の動詞活用形とアクセント・I 類動詞編」『聖霊女子短期大学紀要』43: 46–61.

近藤清兄（2016a）「秋田県男鹿方言の動詞活用形とアクセント・II 類及び不規則動詞編」『聖霊女子短期大学紀要』44: 30–46.

近藤清兄（2016b）「秋田県男鹿方言の動詞活用形とアクセント・形容詞及びコピュラ編」『東北大学言語学論集』24: 31–42.

Kubozono, Haruo (2008) Japanese accent. In: Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford handbook of Japanese linguistics*, 165–191. Oxford: Oxford University Press.

McCarthy, John J. and Alan Prince (1993) Generalized alignment. *Yearbook of Morphology* 12: 79–153.

日本語学会（編）（2018）『日本語学大辞典』東京：東京堂出版.
Nitta, Tetsuo (2001) The accent systems in the Kanazawa dialect: the relationship between pitch and sound segments. In: Shigeki, Kaji (ed.) *Cross-linguistic studies of tonal phenomena: Tonogenesis, Japanese accentology, and other phenomena*, 153–185. Tokyo: ILCAA.
大橋純一（2001）「秋田方言の音韻・アクセント」秋田県教育委員会（編）『秋田のことば』32–73. 秋田：無明舎出版.
大橋純一（2002）『東北方言音声の研究』東京：おうふう.
Poppe, Clemens (2016) Iambic feet in Japanese: Evidence from the Maisaka dialect. *Gengo Kenkyu* 150: 117–135.
Poser, William (1990) Evidence for foot structure in Japanese. *Language* 66(1): 78–105.
佐藤稔（1982）「秋田県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 4—北海道・東北地方の方言—』271–295. 東京：国書刊行会.
Shimoji, Michinori (2009) Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan. *Gengo Kenkyu* 135: 85–122.
柴田武（1962）「音韻」国語学会（編）『方言学概説』137–208. 東京：武蔵野書院.
上野善道（2003）「アクセントの体系と仕組み」上野善道（編）『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』61–84. 東京：朝倉書店.
Yamaguchi, Kyoko (2010) The difference in accentuation between the present and the past tenses of verbs in Japanese. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 14: 1–10.
横谷輝男（1997）「フット境界を越えるアクセント核移動：東京方言複合名詞からの証拠」『音声研究』1(1): 54–62.

執筆者連絡先：
金沢大学
人間社会研究域 歴史言語文化学系
e-mail: suganumak[at]staff.kanazawa-u.ac.jp

［受領日　2019 年 12 月 30 日
最終原稿受理日　2021 年 5 月 20 日］

Abstract

On Accentual Pitch Patterns of Accented Verbs in the Yokote Dialect: An Analysis Based on Iambic Feet

Kentaro Suganuma
Kanazawa University

This paper discusses the accentual pitch patterns of past and non-past forms of accented verbs in the Yokote dialect spoken in Akita Prefecture. In past forms of this dialect, the accent of accented verbs falls on antepenultimate, penultimate, or ultimate morae, depending on the phonological characteristics of the verb stem (e.g., /oto'si-ta/ 'dropped'; /tabe'-ta/ 'ate'; /mi-ta'/ 'saw'). Conversely, accent always falls on penultimate mora in non-past forms (e.g., /oto's-u/ 'drop'; /tabe'-ru/ 'eat'; /mi'-ru/ 'see').

This paper proposes phonological rules based on iambic feet to account for these accentual pitch patterns. Furthermore, this paper suggests that the posited rules can also account for the accentual pitch patterns of many other verb conjugations and adjectives.